国際情報学部

テクノロジーと法の未来へ

Vol.11

iTLの学びから情報社会へのアウトプットを考える

国際情報学部国際情報学科3年
私立普連土学園高等学校（東京都）出身
王安理（おうあんり）

はじめに

私は、社会における人工知能（AI）を含む情報通信技術の利活用や、社会変容に興味があり、AIの社会的インパクトと人間の構想力の在り方をテーマとする須藤修先生のゼミに所属しています。

ゼミでは、OECD発行のAIレポートを読んで議論したり、企業の方からお話を伺ったり、政府会議（人間中心のAI社会原則会議）の傍聴をしたりと、さまざまな機会をいただきながら勉強しております。

本稿では、それに関連して今年度特に取り組んだことのうち、2つをご紹介したいと思います。

社会情報学会での発表

須藤ゼミ所属の3年生10名のうち5名ずつでグループに分かれ、それぞれ論文を作成し、9月11日の社会情報学会で発表しました。

テーマ決めの際、私は前述したような興味のもと、社会の形成や変容に関わるスマートシティの取り組みを取り上げたいと考えました。そこからグループで話し合い、スマートシティの基本理念のひとつで、「スマート」の鍵となるであろう「市民（利用者）中心主義」に着目しました。この在り方が各自治体に委ねられていて、達成するための具体的なプロセスや方法の明示がないことが課題だと考え、「住民主体のスマートシティの在り方」という題で論文を執筆することとなりました。

本論では、まず住民主体の在り方として、住民が主体的に地域課題を認識し政策に関して意見を述べたり自ら行動を起こしたりすることと、住民のデータ提供による協力の2つを挙げ、それぞれを促進させるためのツールや教育、認知の必要性を、データを用いて考察しました。次に、国外の失敗事例と、モデル事業となっている都市の例を調査、比較することで住民参画の必要性や促進方法を改めて検証するという構成にしました。

グループでの論文執筆は、役割分担や認識の共有といった点で難しさもありましたが、自分になかった視点やアイデアを得ることができました。

発表にあたっては、モデル事業として取り上げた2つの自治体の政策担当者にオンラインでのインタビューを行い、詳しい取り組みやスマートシティ自体への印象、抱える課題などについて伺いました。現場の方の視点は、自分にとって新しいものばかりで大変勉強になり、自治体のデータ活用やDX推進における課題について多くの示唆を得ることができました。

学会での発表では、スマートシティの取り組みには技術的な面からの考察が多い中、「人」という視点から考えたことを評価していただきました。また、ほかの方の発表から研究手法や領域について学ぶことができ、次の論文執筆と発表へのモチベーションにつながる経験となりました。

iTLAI研究会

ゼミとは別に、私は「iTLAI研究会」でも活動しています。本研究会は須藤先生と斎藤先生のお声掛けで、今年5月に国際情報学部生の有志13名によって立ち上げられました。研究会では、英語を用いてAIレポートや企業のAIポリシーを読み、倫理や政策について議論したり、それらに関連するトピックを選び、調査、発表をしたりしています。夏休み期間中にはそれぞれグループに分かれ、「AI政策傾向の日欧米比較」「AIによる著作・特許権問題」「信用スコアシステム」「ターゲティング広告におけるAIとアルゴリズム」について調査し発表会を行いました。定期的に自身が関心を持つ課題を設定し、論文などを読んで知識を深め、それをまとめてアウトプットとして発表したり、ほかの調査の報告を聞いたり、議論を交わしたりすることは、

授業とはまた違う雰囲気の中での学びとなっていると考えています。

これから

「どんなアウトプットをしたいか」、「社会にどんな影響を与えたいのか」。これは、入学直後、勉強やインプットを増やすことばかりが良いことだと考え、その目的や勉強の先にあるものが見えていなかった私が、先生からいただいた言葉です。当時の自分にとってそういった視点は衝撃的で、以来ずっと頭に残っています。3年次になり今までの学修を応用しアウトプットする機会が増え、さらにこの言葉を意識して行動するようになりました。

デジタル経済やデータ社会といった変革の時代の中で、将来的には、グローバルに活躍し、公平で豊かな社会の実現に貢献できる人材になりたいと考えています。

今の自分にできること・したいことと、将来達成したいことを照らし合わせながら、着実にステップアップしていき、充実した学生生活になるよう、引き続き励んでまいります。

社会情報学会で用いたスライド(タイトル)

iTLAI研究会の活動の様子

学会終了後に撮ったゼミ生の集合写真